

2. 北京の調査結果の特徴に関する分析

劉 堅 (中国教育部・基礎教育課程教材発展センター教授)

付 宜紅 (中国教育部・基礎教育課程教材発展センター副研究員)

(1) 調査背景

① 類似調査に関して

近年、中国では、教育研究の多くが児童・生徒の学習意識や実態に関心を示すようになり、また、2001年に始まった中国基礎教育課程の改革にともなって、中国国内でそれに対応した調査や研究が行われるようになってきた。したがって、最近では北京の小学生が今回のような質問紙調査を受けることが多くなっている。そのうちでも比較的影響力のある国際比較調査は、中国青少年研究センター、日本青少年研究所、韓国青少年開発院が共同で実施した北京（18校の1,553名）、東京（16校の1,576名）、ソウル（17校の2,120名）の小学4年生～6年生を対象とした「小学生の生活習慣に関する調査」である。2007年5月28日、中国青少年研究センターは、この調査結果（『中日韓3国の首都における小学生の生活習慣研究』）を発表した。そのうち、とくに注目されたのは北京の小学生の勉強に対する関心が非常に高いことである。たとえば、学校の授業が終わると、「家へ帰って、1人で勉強したりする」割合は6割である。北京の小学生の67.7%が休日にたいいて「家で勉強する」と答えている。「よく勉強すれば、将来いい仕事がある」（53.8%）というのが北京の小学生がもっともよく耳にする親の言葉である。北京の小学生の親が重視する子どもの

学習習慣の第1位は、「言われなくても宿題をする」である。さらに、78.2%の北京の小学生が「勉強のできる子になりたい」と思い、半数以上が音楽や絵画などの才能があればと願ひ、勉強がよくできる友だちが好きだなどと回答している。

この他、中国国内の類似の調査にも同様の結果がみられる。たとえば、2005年10月25日に中国青少年研究センターから発表された北京、上海、広東、雲南、甘肅、河南の6つの市と省で行われた「中国の小中高生の学習と生活の実態と期待に関する調査」がある。それによれば、過半数の小中高生は、平日・休日を問わず、宿題をする時間が中国教育部の規定する標準時間を超えていて、とりわけ、中学生の標準時間超過の割合が非常に高い（中国教育部の規定によれば、小学1年生～3年生は1日の宿題は30分以内に終える量、4年生～6年生は60分以内に終える量とされている）。

② 本調査票の質問の設計に関して

調査票の作成にあたって、今回の調査は現代の世界の小学生に共通している問題に対応した質問内容であると感じた。全体的に調査票の設計がとても細かく、児童の学習に関する意識・実態、たとえば、家での学習の様子、学習の行動や意識に関係する日常生活での行動習慣、さらには勉強の効用、社会価値観や

将来希望する進学段階、心身の疲れなどが、広範囲にわたってたずねられている。したがって、本調査は一定の妥当性を備えており、児童の学習に対する意識や現在の学習実態を一定の側面から映し出すのに十分なものであるといえる。中国の児童の置かれた実際の環境や社会的、文化的背景を勘案し、私たちは調査票の中の個別の質問事項について修正提案を出した。その中には内容に関するものもあり、また言葉の表現上の提案もある。たとえば、質問⑩「あなたは、次のように思うことがありますか」では、北京版については、私たちは全6項目のうち、最初の2項目について修正した。日本国内の調査票では、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」ではあったが、北京版では「将来生活するのに困らなければいい」に改めた。なぜかという、調査票の中の「学力」に対する北京の児童の理解が他の国と大きく異なってしまう可能性があるからである。近年、中国の就職に対するプレッシャーは日増しに厳しくなっていて、社会の労働力は相対的に過剰で、大学を卒業しても就職できず、さらには仕事につけなくて、生活に困窮する修士や博士課程卒業生もいるという報道があるほどである。

質問⑩の第2項目も同様である。日本版では「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」を、北京版では「高校、短期大学あるいはふつうの大学に入れればいい」に改めた。修正の理由は、次の第3項目「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」の「いい高校や大学」とはっきり区別するためである。同時に、中国では高等学校、短大、大学間の学力格差が比較的大きいので、それを1つにまとめて判断を下すのは難しいことを考慮した。

前述した質問以外に、「⑧ B. あなたは、どのくらいの成績がとれたらいいと思いますか」「⑧ C. あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか」「⑩ 5. 今は勉強することが一番大切なことだ」

などのような類の質問においては、中国の北京の小学生に関していうと、私たちは若干の懸念を抱いている。中国では、子どもの誕生から日々成長しているなかで、家庭・社会・学校では、「優秀な成績をとるのがよい子どもだ」「努力して初めてよい成績をとることができる」と子どもに対しいい続けている。中国では昔から、そうしたことを子どもに伝える故事や伝説が無数にある。学校や家庭において、疑いを挟む余地のない1つの結論が出てしまっている。したがって、子どもがこのような質問に答える際、思考がなされていない、回答が集中してしまうことが心配された。しかし、6か国が参加する国際調査であることを考慮して、できるだけそれぞれの都市の傾向がみられるように、統一した質問項目を保つようにした。

(2) 本調査結果に関する分析

① 北京調査の数値が全体的に高いことへの解釈

全体からみると、北京調査の数値が比較的高いが、これは私たちの予想から外れるものではない。というのは、前述したように、類似の関連調査で、勉強に対する高い関心について、北京の子どもはすでに何度もその特徴を世界中に示しているからである。それに加えて、社会全体およびふだんの教育において、学習態度に対する是か非かという境界がはっきりしているからだ。小学生についていうと、やるべきことは何か、何が正しく、おとなが何を望んでいるかなどを十分にわかっている。したがって、児童がこの類の質問に回答したとき、これを選択すべきだ、あるいはこの回答がおとなの望んでいるものだという判断にしたがって選択してしまい、自分なりの思考や実態にあわない回答をしている可能性がある。前述したさまざまな理由から、北京調査の全体結果に関する数値が高いという事実に対しては、基本的にはその傾向に違和感を持っていないが、一部には回答者の心理的

要因が働いていることも否定できない。

②北京の児童の高学歴志向について

調査票の質問⑩、⑬から、北京の児童が学歴を非常に重視しているという傾向が明らかになってきた。たとえば、学力観をたずねた質問では、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」が84.4%を占める。希望する進学段階については、「修士、博士まで（基礎集計表では「大学院まで」）」が65.2%に達し、他の都市を大きく上回っている。

北京の児童のこのような意識は歴史文化や社会的現実の両面から理解する必要がある。中国の数千年の科挙文化はごく自然に社会に一種の特有の考え方を作り上げた。一すなわち勉強して官僚になるということである。「書籍の中に黄金の家がある」「書籍の中に美女がいる」といわれるのは、よく勉強し、官職が手に入れば、おのずから円満な家庭や裕福な生活などすべてが獲得できるということを示している。科挙の時代には、1人が試験に合格して挙人となれば、家族みんなが豊かになるというのは確かに間違いのない事実だった。たとえ今日であっても、家を離れ、勉強して、ついに事業を成功させ、家庭全体の経済状況を一変させた事例はいくらでもあるのだ。勉強することが家庭や自分自身の状況を変える主要な手段なのである。この歴史的文化的考え方は今日でも依然として根強く、中国社会の一人ひとりに影響を与えているといわざるをえない。

また、児童のこのような意識も、やはり現在の中国が依然として「学歴社会」であるという現状とぴったり合致している。今日、社会の就職プレッシャーがますます厳しさを増していることで、雇用側は出身学校と最終学歴をことさら重視し、かつ学歴を人材選抜の基本条件とするようになってきている。大都市の大企業や政府機関は、基本的な採用基準を大学院卒業以上としており、中小企業あるいは機関であっても四年制大学卒業の学歴を要求

している。このような状況が児童に高学歴の追求を学習目的とするという意識を持たせ、いたしかたない現実になってしまったわけである。一方、一般の専科学校（日本の短期大学に相当する）・中等専門学校、技術職業学校の卒業生の多くが就業するのは単純で技術的な仕事であり、仕事環境、社会的地位や待遇および保障において、四年制大学卒業生とは相当の隔たりがある（この状況は現在改善されつつあり、中等技術者の不足によってこの部分の人員の給与・待遇が日増しに上昇している。しかし、社会的地位などの面でいまだ大きな変化はない）。したがって、大学に進学することや、可能であれば学歴が高ければ高いほどよいというのは、大部分の家庭の希望であるといえる。児童にとっていえば、勉強に励むことによってよい成績をとり、希望するさらに上のレベルの学校に入れば、それこそが親の期待や願望にさらに一步近づけることになるのである。ほとんどの人は心の中で、高学歴と高い社会的地位や高収入をイコールで結びつけて考えている。現在の社会の実態がすでに完全にそうではなくなっているとはいえ、やはり中国人の伝統的意識のなかで「高官は高給取り」であり、広く社会に認知されている成功に対する考え方は、これからもしばらく中国人の子どもも教育や就業意識に対して、強く影響を与え続けるであろう。

③質の高い教育資源の不足と不均衡がもたらした児童の勉強に対する高い関心

社会通念や家族からの期待が、確かに児童の学習意識に影響を与えている。しかし北京市の小学校から中学校への進学実態もまた、小学生やその保護者の行動に直接影響を与えているといわざるをえない。

「中華人民共和国義務教育法」では、小学校から中学校への進学は最寄りの中学校に入学すること、いかなる形式の試験や選抜も容認しないことをはっきり規定している。北京市教育委員会も区域ごとの最寄りの学校への入学と、いかなる学校のいかなる形式の試験

や選抜も容認しないことを明文化している。しかし、現実には、保護者はやはり学校を選好しているのである。

1970年代末、当時の教育資源の不足を解決するため、エリート人材の養成を急ぐ必要があったため、国は一部の学校を重点校に定め、経費、人的資源などの面で優先的に投資するという政策を実施してきた。これらの学校は率先的に教育改革を行い、優秀な人材や教師の育成に貢献はしたが、同時にまた、ふつうの学校との格差が次第に広がった。21世紀に入り、国は、児童・生徒全体に関心を寄せ、基礎教育全体のレベルの向上に力点を置くようになり、教育の均衡的な発展を促す政策を推し進め始めた。たとえば、今までは人的資源や経費などの投資が手薄になっていた学校に重点的に援助するなどの施策をとっている。しかし、今のところ、当時の重点校は一般校より依然として、知名度がはるかに高く、また運営条件や教師の資質においてもはるかに先を行く地位にあるので、ほとんどの保護者はわが子を重点校に進学させたいと望んでいる。そこで重点校は、面接を利用して大量の入学希望者を対象に選抜を行う。

選抜時には、子どもの興味や得意なことに注目する。北京でさまざまな芸術、スポーツ類の習い事・おけいこ教室が盛んになるのはまさにこのためであろう。子どもの知的能力や学業に対するテストを行う学校もあるので、保護者はこのようなテストに対応するために、子どもに課外の課題を与えて補習を行っている。このような北京の社会的背景が、本調査の習い事や学習塾の状況に関する質問において高い比率を示している（習い事：「何もしていない」5.5%、通塾率：76.6%）1つの大きな原因ではないかと考えている。

当然ながらこれは中国の一人っ子政策と無関係ではない。各家庭にただ1人の子どもしかいないので、経済状況が許す限り、保護者たちはわが子に少しでも他の人より多くの芸術的、スポーツ的な才能を持って、競争のなかで優位に立ってほしいと願っている。その

ような状況もあって、学校外の学習時間に関する質問で、北京の小学生の学習時間が長いという結果が出ている。児童は学校の教師が出した宿題を終わらせることのほかに、家庭教師や学習塾が出した宿題をする必要があり、さらに親から出されるさまざまな問題集をこなすことも多い。小学校低学年では、学校が出す宿題の多くは暗誦、音読、簡単な計算問題および工作などだが、中学年や高学年になると、計算ドリル、漢字や単語の書き取り、英語の暗誦や資料調べといった宿題が多くなる。子ども間の学力格差が大きいことなどから、宿題を仕上げるのに要する時間にもばらつきが出てくる。学校が課す宿題に比べて、保護者が課す宿題内容は習った知識の復習や定着のための練習問題が多く、新しい学習内容への予習もある。その目的は習った知識を定着させて、テストの成績を確実なものにすることにある。このような宿題事情は、テレビを「ほとんど見ない」比率が25.4%と高く、ソウル（16.9%）や東京（5.2%）などの都市をはるかに上回っている1つの原因になっている。北京の子どもは小学校段階から早くも競争を開始し、競争に勝ち残るためのさまざまな準備をしているようだ。

④北京の児童が勉強に積極的であることへの解釈

競争が激しいために学習時間が長くなることだけでなく、教科の好き嫌い、授業中の様子、家での学習の様子などの質問からも、北京の児童が他の都市に比べて勉強に積極的な態度を取っていることがわかる。たとえば、教科の好き嫌いについてたずねると、すべての教科で「好き」（「とても好き」＋「まあ好き」）と回答する比率が高い。家での学習の様子では、「出された宿題をきちんとやっていく」が75.1%（「あてはまる」の%、以下同）、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」が54.4%で、6都市の中で肯定率がもっとも高い。また、多くの小学生が授業の予習、復習を行い、計画を立てて勉強す

ることができる。北京の小学生がこれらの学習習慣関係の項目に対し高い数値を示していることがわかる。

この結果に対して、2つの側面から分析を行いたい。1つは、前述したように、児童の意識のなかに当然そうしなければならないという考えが働き、そういう選択をした可能性を排除できないことである。中国の学校と家庭では、どのような学習状態がよいものであるか、学校で学ぶ者として、何をなすべきか、一人ひとりの児童がはっきりと知っているといえる。たとえば、勉強が好きでなければならない、予習復習をしなければならない、きちんと宿題をやらなければならない、できるだけ親から言われなくても自分から進んで勉強しなければならない、計画を立てて勉強しなければならない等々である。もしあまり質問方法を考えず、子どもに直接質問したら、おそらく本音や本当の行動を隠した回答しか返ってこないのではと思う。この点を考慮して北京の数値をみる必要がある。

一方、中国の現在の学校教育改革、教育課程改革が児童の学習意識や学習習慣を養ううえでよい影響を与えていることを認めるべきで、本調査の具体的な数値から教育改革のよい影響をみることができる。たとえば、各教科の授業内容に対して児童は高い理解度を示している。つまり教育内容の難易度が適切で、教師の授業の組み立てが上手であるともいえる。また、授業の様子をたずねたところ、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」では、9割前後の肯定回答（「あてはまる」＋「まああてはまる」の％）を得ている。これらは、6都市の中でもっとも高い数値である。さらに日常生活の「学習」についてたずねた質問でも、「文学・小説・物語・童話などの本を読む」「新聞のニュース欄を読む」「美術館や博物館に行く」「家でペットや動物・植物の世話をする」の各項目で、北京は高い数値を示している（6都市の中でトップ）。ここから中国の家庭で

は、子どもの成長や学習に有利な環境や条件を可能な限り整えようとしていることがわかる。また、学習上の悩みに関する質問では、「覚えなければいけないことが多すぎる」は、選択する比率が22.3%だけである。これらの数値結果は、まさに中国で今行われている教育課程改革がもたらした変化ではないかと考えられる。新しい教育課程標準（学習指導要領）では極力、丸暗記の内容を減らし、児童の学びを社会生活や実践と結びつけることが求められている。また、すべての教科で児童が自分で資料を探し、問題を解決する能力を養うことが大いに提唱されている。各教科の教師は「新教育課程標準」にしたがって意識的にそのような宿題を増やし、インターネットなどを利用して、自分で問題を解決するように児童を促している。学校を出て、見学することや動植物を育てることなどの活動は、児童の日常的な観察力や記録能力を養い、学校だけでは学べない知識や体験を増やすことにつながり、学校の授業と課外の学習を有機的に結びつける試みとなる。課外の読書について、「新教育課程標準」では小学校低学年で5万字、中学年で40万字、高学年で100万字と、はっきりとした規定がある。私たちは今回の調査から、それが具体的に実行され、効果が出始めていると感じ、喜ばしいことだと思っている。

（3）高い数値結果の背景への考察

私たちは、本調査で示された北京の児童の学習意識と実態は、実際の状況と合致していると考え。調査結果からは、教育の内容や方法、また学校や家庭の教育に対する考えが変化しつつあり、かつ、そのために積極的な努力がなされていると推測できる。一方で、歴史的、文化的な要因、また旧体制にもたらされた一部の問題によって、児童の実際の負担は軽減されていない。保護者や社会の学力や人材に対する考えも、まだ変えていく必要がある。このようなさまざまな矛盾やプレッ

シャーの下、児童は依然として相当程度に受動的、盲目的な状態で、常に矛盾を抱え、迷いながら、学習しているように感じる。

そのことは、本調査のいくつかの数値からもみて取ることができる。たとえば、「何のために勉強しているのかわからない」が3.9%であるなど、学習の目的がとてもはっきりしており、「新しいことを知るのが好きだ」(74.5%)という意識も高い。これは学習の内的動機が明確であることを意味している。一方で、「問題が解けたり、何かがわかるとうれい」を選択した北京の児童は49.4%しかおらず、東京の79.5%やソウルの93.2%をはるかに下回り、6都市の中で最下位であることもわかった。この数値は、北京の児童の学習が受動的である側面を示している。学習の目的はとてもはっきりしているが、それは子どもの内心から発したのではない。今の学習を将来の職業や生計と関連づけるのは小学生にとってまだ難しいと思われるが、中国の小学生は早くも関連づけるように仕向けられているようである。子どもは重い責任と義務を背負って学習しているが、学習することの喜びはあまり感じていないのではないかと考えている。多くの子どもが、よい子であるため、また親の期待に応え、社会から認められるために勉強しているのである。このような受動的な状態では、勉強が順調にいったときでも、心から感じる喜びはそれほど強いものではなく、逆に親を感じる喜びより弱いのではないかとと思われる。なぜなら子どもたちの心の中では、学習は親から与えられた任務を達成させるためにしているにすぎないからである。

本調査から、中国社会の価値観の変化が現代の子どもたちを惑わせていることもわかった。すなわち、子どもたちは親と学校から勉学に励んだら将来出世できるという教育を受けてきた。一方で、子どもたちも拡大し続けている社会の就職に対するプレッシャーや価値観の変化を感じているはずである。前述のように、多くの大学卒業生が就職できないことも知っている。そのような小学生の意識は、

本調査の結果にもみられた。社会観・価値観に関する質問結果をみると、「(わが国は、)競争がはげしい社会だ」では、「とてもそう思う」が64.7%であり、6都市の中でもっとも高い。しかし、「(わが国は、)努力すればむくわれる社会だ」は48.1%にとどまっている。また、勉強の効用については、「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」や「お金持ちになるために」という伝統的な考え方に「とても役に立つ」という比率は、それぞれ39.2%と26.0%しかない。社会、家庭、学校で伝統的な教育を受け、成長してきた子どもたちは、勉強の目的が金持ちになることあるいは出世することであると思いつつも、このような本音をはっきりいうのを避けている可能性が考えられる。一方では、近年、中国の市場経済が急速に発展し、それに対応する体制と制度がまだまだ整っていないこと、また一部の「成金」の出現、とくに子どもたちがあこがれている映画スター、歌手、アイドルの出現などが、子どもたちの価値判断に影響を与えているとも考えられる。子どもたちが多く目にするようになってきているのは、「勉強」と「出世」、「大金を稼ぐ」がだんだん正比例しなくなってきた現実である。このために今日の子どもたちは父親の世代の伝統的価値観を疑い、反対しはじめているのではないかと私たちはみている。中国の子どもたちは伝統的価値観と社会の現実との間のさまざまな矛盾や衝突のなかで勉強しているので、しばしば学習動機が矛盾したり、不安定なものに陥ったりしている。学習が受動的な状態にあることを免れたいと考えられる。

いずれにせよ、今回の調査結果から、中国の教育改革が小学生の学習意識・行動により影響を与えていることを理解する一方で、教育の抜本的な改革とその推進には社会全体の努力が必要であるということも痛感している。教育体制や一般校の物的・人的資源といった教育環境を徐々に改善していくことや、多様な価値観が伝統的文化と衝突を起こすことも、中国の教育に大きな影響を与えつつあ

る。中国の改革開放政策と市場経済のさらなる発展、企業の雇用に対する考え方や、雇用制度の抜本的な改革と社会の人材に対する考え方などが変化しつつある。それらの価値観が変化して民主意識が次第に強くなってきたことなどにもなって、家庭、社会、学校の子どもに対する期待や見方が変わるのであるうし、今まさに変わりつつあると信じている。

今回の国際的視野での調査結果、および中国国内の関連研究の成果を教育研究者として考察すると、中国では家庭、社会、学校が高すぎる期待、重すぎる期待、早すぎる期待を抱き、小学生に強いプレッシャーを与えていると考えられる。また、子どもたちはおとな社会の価値観、社会と親の要求や期待に合わせて、幸せ、勉強に対する興味や喜びとは何かを考えているのではないかと感じる。さらに、すべての教科で「好き」と回答する比率が高いという本調査結果からは、北京の地域社会の文化や生活が依然として相対的に一元的なものであり、親が忙しいことや家庭の中にきょうだいがいないことなどの現実の一側面が、問題として露呈している可能性が考え

られる。

しかし、そうであるにもかかわらず、今回の調査および関連研究は、今日の中国の学校が児童・生徒にとってはやはり大きな魅力を持った場所であることを示している。そこから私たちは、未来が明るいものであると感じる。子どもたちが楽しく学校に通い、多くの仲間たちと交わりながら学ぶこと、教師が子どもを励まし、素晴らしい活動をすることが、子どもの成長により影響を与え、学校をさらに魅力的なものにするだろう。このため、授業の内容や方法の改善が、より重要視される。今日、私たちは、いかに児童の学習を受動的なものから能動的なものに変えていくのかを考えるべきである。子どもに勉強の過程でさらに積極的な情緒的体験を積ませてほしい。また、子ども自身が心の底から勉強が好きで、勉強のすばらしさや楽しさを本当に感じとれるようにしていけたらと考える。これはまさに現在中国が推し進めている教育課程改革であり、基礎教育分野では今後長い時間をかけて、重点的に解決していく必要がある課題でもある。